

ぼくの
昔の東京生活
赤瀬川原平



筑摩書房

ぼくの昔の東京生活
赤瀬川原平

筑摩書房

赤瀬川原平（あかせがわ・げんぺい）

一九三七年横浜生まれ。画家。作家。路上観察学会会員。武蔵野美術学校中退、前衛芸術家、千円札事件被告、イラストレーターなどを経て、一九八一年『父が消えた』（尾辻克彦の筆名で発表）で第八回芥川賞を受賞。どこにもたどり着けない「無用階段」といった超芸術物件を、「トマソン」と命名。宮武外骨、3D写真、中古カメラなどのブームの火付け役でもある。著書に『東京ミキサー計画』『超芸術トマソン』『少年とオブジェ』『外骨という人がいた！』『ちよつと触っていいですか——中古のカメラのススメ』『老人とカメラ』（ちくま文庫）『新解さんの謎』（文藝春秋）『老人力』（筑摩書房）など多数。

ぼくの昔の東京生活

二〇〇三年三月十日 初版第一刷発行

著者 赤瀬川原平

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五—三

振替 〇〇一六〇—八—四一二三

印刷 明和印刷

製本 積信堂

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記へ。

〒三二一八五七 さいたま市榎引町二一六〇四

電話 〇四八（六五一）〇〇五三

筑摩書房サービスセンター

Printed in Japan 2003 © Akasagawa Genpei

ISBN4-480-81625-9 C0095

ぼくの昔の東京生活 目次

ぼくの東京生活白書

3

アメリカ車／中央線／お盆彫り／アドバルーン／裝飾屋
／文字描き／石油コンロ／メーデー／トースト／コンド
ウ君／泥棒／お目見え泥棒／サンドイッチマン／自転車
泥棒／アテネ・フランセ／盛りそば／デパートの仕事／
鯨テキ屋／タバコ／プロのレタリング／出来高払い／政
治スローガン／代々木の屋上／祝電の配達／野菜炒め定
食／下町の看板屋／映画ポスター／秘密諜報員／東京の
夜／東京の映画館／歌声運動／喫茶店での個展／食べた
もの

ちよつと昔の文化生活

109

洋式トイレ／石油ストーブ／名神高速道路／深夜喫茶／

オート三輪／スーパーマーケット／テレビ／輪ゴムとセ
ロテープ／コカコーラ／サンマータイム／木製冷蔵庫／
ラジオ／手動式パチンコ／蓄音機／ジューパン

街の手ざわり

155

信号機／電柱／橋／郵便ポスト／公衆電話／坂道／公園
／アーケード／自動販売機／踏切／交番／マンホール／
トンネル／墓地／ゴミ収集所／土手／駐車場／神社／公
衆便所／ドブ川／時計台／駅／街路樹／歩道橋

あとがき

219

装丁
南 伸坊
写真
坂本真典

ぼくの東京生活白書

アメリカ車

東京に出てきたのは十八歳のとき。昭和でいうと三十年。スターリンが死んだ二年後だ。マレ
ンコフとかベリアとか、ソ連の政權をめぐる黒々とした報道が伝わってきた。

別にぼくは思想とか政治に強い方ではなく、ぜんぜん弱いんだけど、スターリンが死んでマレ
ンコフとかいうと、当時の空気がぶわーんと蘇ってくる。その後のロシアのエリツインとかプー
チンというのと、当時のソ連のスターリンというのでは印象の濃度がまるで違う。

そんな時代にはぼくが東京ではじめて金を得たのはサンドイッチマンだった。アルバイトである。
いまの東京なら働き口はたくさん揃っているけど、そのころは仕事自体がなかった。

サンドイッチマンという名前も変なもので、本当は体の前後にパネルを下げて、体全体がサン
ドイッチ状態にあるのが正調らしいが、実際にはプラカードを手で持つスタイルがほとんどであ
る。その場合はサンドイッチじゃないので、アドマン、なんていう人もいたが、結局はサンドイ
ッチマンという名前で通っていた。いまはどうなんだろうか。

この仕事の欠点は恥ずかしいということである。何しろ人通りの多い所にじーっと立っている
わけだから、人目にさらされている。これは人によって違うだろうが、ぼくなどは猛烈な恥ずか

しがり屋なので、どうにも苛酷な仕事だった。

でも自分では見られてる、見られてると思ってるけど、通行人はいちいちサンドイッチマンなんて見てはいない。看板は見るかもしれないけど、持つてる人などは見ないもので、だからこの恥ずかしさというのは自意識過剰の産物である。

とにかくはじめは緊張していて、時間が経たずに困った。じーっとしてるだけだから、ぜんぜん時間が経たない。とくに冬はつらい。じーっとしてるので寒くて寒くて、時間が完全にストップしたみたいだった。

その時つくづく思ったのは、移動する一時的な寒さと、一個所に拘束された寒さとは、同じ温度でも体の感じ方がまるで違うということ。暖かいレストランから出て暖かい家に帰る途中の寒さは、むしろそれを味わうことができる。でも一個所に四時間いなければいけないというときの寒さは、もうほんとに拷問である。

では夏はというと、これがまた暑くて暑くて、夏が暑いのは当り前のことではあるが、やはり逃れられない暑さというのは苛酷なものである。

だから春と秋は嬉しかった。自意識過剰が少し解けて、人目にさらされる恥ずかしさがなくなってくると、むしろ通行人を観察する面白さを知ようになる。慣れてくると、自分が一種の棒杭のような、黒子くろごのような状態でいるのがわかり、通行人の、何というか、生なまな表情というのを見る余裕が出てくる。

観察といつてもいちいちメモするような真面目な観察じゃないけど、さまざまな人間の性質というものが、言葉にはならないけど、その時期にずいぶん自分の目に染み込んできたんじゃない

かと思う。

観察では車を見るのが好きだった。いまみたいに車が一家に一台という時代ではなく、自家用車なんてほとんどない。

タクシーによく使われていたのは日野ルノー。フランス製の小型軽便車で、たぶんライセンスをもらって日野で造っていたのだろう。

そういうのではオースチンもあった。これはイギリスの小型車で、日本ではどこで造っていたのか忘れたが、丸っこくて、ヘッドランプから流れる線がボディ横の後輪の辺りですつと消えていて、その消え方がぼくには煮えきらない感じだった。

その時代は車にそれぞれみんな特徴があり、個性があり、いまとはまるで違う。スチュールドベーカーなんてシャープで格好よかったな。マーキュリーなんて頭から見るとロケットを三本束ねたようなデザインで、これも格好よかった。

キャデラックは派手でちよつとぼくの好みではなかったけど、リンカーンはそれより地味めの高級車で、なかなか気に入っていた。

たくさんあふれていた中級車はビュイック、プリムス、フォード、やはり大好きというふうにはなれなかった。ビュイックとリンカーンはたしかちよつと似ていたな。

ナッシュというのはずんぐりして、格好よさを拒否したような、逆にそれがパワーみたいに感じられて覚えている。いま流行りのベンツやBMWというドイツ車はあまり見かけず、もっぱらアメリカ車であった。

シトロエンを見た時には感動したな。醜いアヒルの子といわれるフランスの大衆車のシトロエ

ンだが、それががらりとモダンデザインの高級大型車を造ったのがたしかそのころだ。プラカードを手に立っている目の前をすーっと通った時には、何か高貴な有名人に会ったような感動で、さーっと舞い上がったものである。

中央線

東京ではじめて靴底が触れたのは、東京駅のホームだった。

それはまあ当り前のことだが、ふつうの駅ではなくそこが東京の駅だと思うと、感慨もひとしおだった。

それまで住んでいた大分でも名古屋でも、交通機関はせいぜい市電だったので、駅のホームというのは特別な感動があるのである。

そのホームに迎えに来てくれていたのが、大分の中学校以来三年ぶりに会う友人のY野君であつたのも、特別な感動を伴っている。

しかしいま書いてみて、たつた三年ぶりであつたのかと不思議な気がする。あのころは十年か十五年ぶりぐらいの感じだった。いまは三年なんてあつというまに経ってしまう。

そうやって東京に出てきて、はじめて寝起きしたのは、中央線でずうっと行った先の国分寺で

ある。大分のときからの、Y野君と共通の先輩のY村さんが国分寺に住んでいて、そこに厄介になつたのだ。

ぼくらには武蔵野美術学校受験という目的があつて、仮りに落ちたとしても、ぼくはもう東京で生きていこうと考えていた。何もあてはないけど。

国分寺のその先輩は、昔の児島善三郎画伯のアトリエを借りて住んでいた。その中二階にある藁蒲団わらぶとんに寝かせてもらったんだけど、そもそも高校卒業を控え、一人で世に出てくるのがはじめてのことで、緊張のしっぱなしである。

国分寺の駅もいまはもうだいぶ変つたが、それよりも変つたのは吉祥寺だ。武蔵野美術学校はいまはちゃんとした大学になつて鷹の台にあるが、そのころは吉祥寺から十五分ほど歩いた所にあつた。

隣駅の西荻窪とちようど中間くらいのところで、その先をちよつと行つて角を曲がると東京女子大がある。

その吉祥寺の駅だけど、細いホームが線路の両側に一本ずつあるだけで、改札口も小さながぼつん。いまの駅からは想像もつかない。

学校は昔の木造の兵舎か何かの転用で、小さくてぼろぼろだった。窓という窓のガラスに全部絵具が塗りつけられて、廊下には水溜まりが出来ていた。

校内におばさん一人の小さな売店があり、タバコをバラ売りしていた。箱売りではなく一本二本で売ってくれる。

ぼくも高校を出たんだからタバコくらい吸わなきゃと思い、少しずつムリして吸っていた。そ

れがやはり本当にムリで、はじめは格好をつけて煙をくゆらせていたけど、そのうち気持ちが悪くなって閉口した。

武蔵野美術学校で知り合った友達が、洋モクのブリキの缶を持っていた。蓋ふたを開けると、吸い殻がたくさん入っている。何だ、吸い殻だ、と思っていると、

「これはみんな洋モクなんだぞ」

と誇らし気にいわれた。ぼくの方も、え、洋モクなのかと目付きが変わり、一つ吸わせてもらった。ああ、洋モクだ、と思い込みながら、その煙は一段と強くて、一段と気持ち悪くなった。

洋モクといってもいまの人にはわからないですね。西洋の、舶来のタバコ。

舶来といってもわからないですね。何しろ一ドル三百六十円の時代（あるいはもっと円安だったか）だから、とにかく西洋が輝き、洋モクは輝いていたのである。

東京に出てきたものの、銀座やその他、有名な場所にはほとんど行く機会もなく、国分寺にいた。そして学校のある吉祥寺へ電車に乗って出て行く。

国分寺の恋ヶ窪というしゃれた名前のところで、友人三人ではじめて部屋を借りただけで、いきなり部屋代が払えず、十日ほどで追い出された。三人とも家からの送金がちぐはぐして、はじめての都会で要領もわからず、いろいろ手違いもあり、とにかく追い出されてしまった。

そんなぎくしゃくがあつて、はじめてちゃんと住んだのは武蔵小金井だった。駅からやはり十五分くらい歩く。

二人で六畳一間、三千円。だいたいそのころの相場である。

さてここに住むんだということで、いったん家に帰って蒲団や本などを持ってきた。

そのころ国鉄の切符を買うと、チッキというのがありましたね。ほんのわずかな割り増し料金で、ある程度の手荷物が別送できる。

いまは引越しというと段ボール箱だけど、当時そんなスマートなものではなく、木製のミカン箱だった。いま考えるとずいぶん手間のかかった高級な箱なのだが、ミカン箱はあちこちの八百屋にあったし、それを分けてもらって引越しに使い、部屋の中で積み重ねると本箱になった。風呂はもちろん銭湯で、洗面所は大家さんのところ。いまと比べたら大変なシンブルライフである。

お盆彫り

ぼくみたいな弱虫が、高校を出てそのまま上京して、よく生活できたと思う。

逆説めくが、金がなかったからできた、貧しいからできたわけで、家が裕福だったらできなかったと思う。

何しろ自慢じゃないが、弱虫で、臆病で、引込み思案で、胃の弱い青びょうたんだ。もし裕福だったらとても家から出られなかっただろう。

貧乏は嫌だけど、とにかくどたん場まで追いつめられる。そこでやっと、火事場の馬鹿力じゃないけど、自活する力が出てくる。

いっぺんに出るわけではなく、仕方なく渋々と出てくるわけで、だから貧乏だからといってすぐ経済的な援助の手を差しのべるのは、必ずしも良いことではない。いまの世の中の風潮は、それをはき違えているところがあると思うが。

体にいちばん焼きついたアルバイトは路上のサンドイッチマンであつたが、あまりにも退屈で、恥ずかしくて、途中でお盆彫りのアルバイトがあつたのでそちらへ行つた。

美術学校だから、そういう工作関係のアルバイトが窓口に来ていたのだと思う。それを先に行つてやつていた同級生に誘われたんだと思う。西武線の田無の辺りに小さな作業所があり、工場というよりは家内工業的なものだ。オーナーはもとは絵描きか彫刻家になろうとした人だけど、どうもうまくいかず、あれこれ金儲けをやつてみるうちにこの仕事に定着したという雰囲気である。

お盆や茶托などで鎌倉彫りというのがあるが、あれをもつとがさがさと粗くしたような感じで、江戸彫りと称していた。

床に腰を据えて、原木の板を両足で挟み、それを丸鑿まるのみで削っていく。鑿跡を粗く残すやり方だから、作業としては案外気が楽だ。多少の鑿の扱いさえ覚えれば、あとは自己流で何とかやつていける。

ぼくは絵も好きだけど木工もわりと好きだから、この仕事は面白かつた。けっこう熱中できる。それと仕事の出来高による歩合制の賃金なので、けっこうやりがいもある。

だから励みましたね。一所懸命やつた。

ぼくは臆病だけど、何か一つ決ると一所懸命やるたちなんだ。